

生活情報誌「ウイーンに暮らす」と婦人会の活躍

ハウザー 壽子

1955年、中立国として独立したオーストリアは東欧圏に国境を接し、政治的にも地理的にもたくさんの問題を抱えていました。オーストリア政府は、国の安全と平和維持への政策の一角として出来るだけ多くの国際機関を首都ウイーンに受け入れることに努力してきました。IAEA（国際原子力機関）、OPEC（石油輸出国機構）、等に次いで、1979年に第3の国連機関UNIDO（国連工業開発機関）が設置された事は大切な外交政策でした。

日本人はというと、始め10人程の音楽留学生と公使館員しかいなかったウイーンにだんだん商社が増えてきて、家族共々赴任するケースが目立ってきました。以前マンションの一部屋を借りていた留学生は少々困った事は下宿の主婦に相談をしていました。マンション全部を借りている商社の方々の相談は、会社の秘書を通してというように変わってきました。皆色々な苦勞をされた事は、「ウイーン



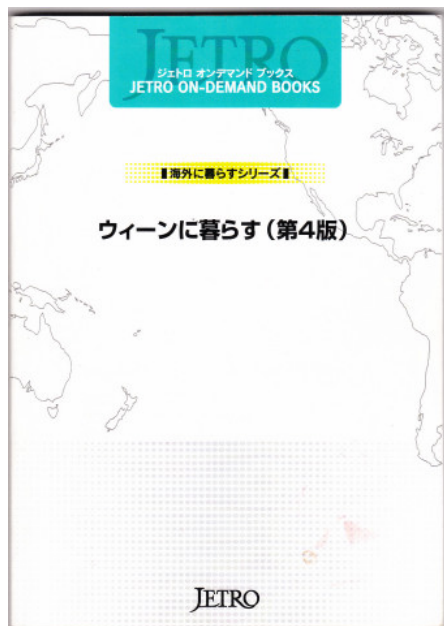
UNO city(国連都市)

に暮らす」が刊行される当然の成り行きだったと言えましょう。「ウイーンに暮らす」は生活物資購入、医療、学校、交通などの情報誌としてウイーンの日本人のために作られた小冊子です。

それにしても、日本の夫人方の努力は大変なものだったと今でも感心せざるを得ません。ウイーンは東欧への出入りに好都合な所でしたから、東欧からの単身赴任の駐在員や、観光地でもあるので、日本からの来客のためにほとんど食事は自宅に招待しておられました。1960年、長期出張されていた方の記事に次の様な事が記されています。「海外旅行をすると誰でも日本食に飢えるものである。個人差はあるが通常、年配になればなるほどそれがひどい。海外生活の長かった人でさえ『ああ、早く日本に帰って、湯豆腐かなにかで日本酒を一杯やりたい。』などと言い出す始末である。このように、日本食に飢えた者達にとって、支店長宅や駐在員卓に招かれたときの嬉しさは、また格別であった。まさに砂漠の中のオアシスである。ご夫人達の心尽くしの料理で、いかにほっと一息ついたことか。」

私も何度かご相伴にあずかりましたが、その味の良さ、見た目の美しさ、品数の多さ、よくこのウイーンでこれだけ物が揃えられる、一流の料亭にも匹敵すると感嘆したものです。

「ウィーンに暮らす」の執筆編集には、現在のようにワープロも FAX も一般家庭にいきわたっていない時代でしたから、毎週商社の方のお宅に集まり分担を決め、



出来るだけ正確な資料を集めました。普通だったら話されない失敗談、苦い体験とその再発防止への対応もたくさん検討されました。手書きの原稿を山と積み、今日では考えられない時間をかけて取材したものの出版の費用がないのも大問題でした。JETRO（日本貿易振興会）に、無料で出版を引き受けていただいた事は大変幸運でした。

これを機会に皆様の親睦が深まった事も事実です。それに加えて新聞記者、国際機関に赴任される方が増え、夫人方の活動と大使夫人の協力もあり、婦人会（N.S.会）の総会は大変活発になりました。クラブ活動の報告、コーラスの後バザーが開かれ夫人方手作りのカステラ、どらやき、大福など。その他、本、衣類が売られ、その収入は毎年クリスマスに、

「ウィーンに暮らす」は改訂を重ね、第4版が2006年10月発行された

St. Anna Kinderspital に寄付されました。St. Anna Kinderspital は癌におかされた子供の治療専門の病院です。第一回は1984年、日本のカラーテレビが贈

られました。子供たちもその父兄も大変な喜びようだったと礼状がきました。第二回は病院内で走れる三輪車3台。第三回はバザーの売り上げが好調になり、まとまった現金を寄付しました。

その後、日本人会から婦人会に合併してほしいとのたつての希望があり、また多くの方々が帰国され、大使館の方の交代もあり婦人会としての活動はやや下火になりました。

日本人会50周年に心からお祝い申し上げると共に、夫人方がいかに重要な役割を果たされたか、ご理解いただければ幸いです。

<Hauser 壽子（ハウザー ひさこ）>

東京藝術大学卒業。1956年文部省留学生として来澳。

1960年ウィーン音楽大学ピアノ科卒業。ヨーロッパでの演奏活動を行う。ウィーン音楽大学 Professor Richard Hauser 氏と結婚。その後8年間、イタリアに滞在。ウィーンに戻ってからはコンセルバトワールにおいて教鞭をとる。

